

86

- 発行者 稲門建築会会長 村松映一
- 編集者 稲門建築会広報委員会 委員長 小菅克己
- 発行所 稲門建築会
〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1
早稲田大学理学部55-5-02-01
電話・ファックス 03-3208-0640
ホームページ <http://www.all-waseda.com/rkogakka/tounon/arch/>
電子メール tounonj@popoy.ocn.ne.jp

制作 都市建築編集研究所
DESIGN KAKEI GRAPHICS
© 稲門建築会

- 巻頭言 村野藤吾賞を受賞して……入江正之
- 村野藤吾論 20世紀を体現した男流建築家……倉方俊輔
- インタビュー 古谷誠章 JABEETUAの認定取得で早稲田建築は変わる！
 岡本 小菅克己 宮川浩
- 学生企画 インターンシップ体験記……秋田真 西野安香 川崎正博 本橋仁
- 建築学科創設 〇〇周年記念事業「始まる」……地主道夫
- 2009年早稲田建築会同クラス会報告……鈴木卓夫

November 2009

News of Waseda Architecture

早稲田建築ニュース

巻頭言

入江正之 〔苗544・院547・博560／早稲田大学教授〕

村野藤吾賞を受賞して

今年、第22回の村野藤吾賞を受賞いたしました。村野藤吾先生のお誕生日の5月15日に、先生ご設計の千代田生命本社(現目黒区役所)にて授与式がございました。審査委員長の池原義郎先生よりメダルと賞状を頂くとともに、スペインから駆け付けたJ・カステイヌ

ー市長や、審査員の富永譲さん、妹島和世さんから祝辞をいただきました。六鹿正治さんからは審査評を、菅原二さんからは人となりの紹介もあり、ご列席いただいた多くの方々と格調の高い雰囲気の中で、式と講演会を無事終えることができました。

1 ガウディ研究が続けてきた関係からスペインのカタルーニャ州で7、8年前から手懸けている、伝統的石造民家の修復・再生のデザインにおける建築作品が対象です。自然が残る周辺環境をそのままにし、組積造

の壁の祖形を際立たせながら、それを未来へと引き立ててくれる鉄の架構体を拮抗させることに努めました。

この施設は、建築のデザインワークショップの場とすることを、市長と構想を進めているところだ。「この場に参画するすべてのものは、初源的にさまざまな使い方が残



された場へ企投されるのであり、現在から過去へ、そして過去より未来へ向けてこの場において何をやるのか、何をなさうとするのか、何を作り上げようとするのかの問いかけの前に立つことになる。すなわち、この場はこの問いかけに、かつ鋭く現在に対峙しつつ歴史に根差しながら空間を作り上げていく意欲を持つ者への開かれた舞台であり、住まうことの直観を喚起する舞台なのである」と、池原先生が評を書かれています。この「住まうことの直観を喚起する舞台」に参画し、早稲田建築の学生や若手建築家たちが世界に伍して、デザインワークショップの場で渡り合うことの実現が、今回の受賞のさらなる意味付けとなると考えております。

授ご逝去



早稲田大名誉教授・井上宇市先生が去る7月17日、逝去された。井上先生は大正7年4月23日、埼玉県秩父町で出生。昭和19年9月東京帝国大学第一工学部船舶工学科卒業。昭和28年早稲田大学理工学部建築学科専任講師、昭和37年より同教授、平成元年、名誉教授。平成4年勲三等瑞宝章叙勲。享年91歳。

井上先生が手掛けた主な設備計画には、早稲田大学理工学部(1963〜67)、代々木体育館(国立屋内競技場、1964)、大阪万博・お祭り広場(1970)、東京海上ビル(1974)などがある。故・丹下健三氏の依頼で設備設計を担当した代々木体育館では、当時井上研究室に在籍していた尾島俊雄先生が大型ノズルによる空調方式を提案した。

井上宇市先生、ありがとございました

尾島俊雄(早稲田大学名誉教授/苗S35・院S37・博S40) 私が大学3年生の時、旧西早稲田校舎の裏門で、突然「尾島君おはよう」という井上先生の大きな声が後ろから聞こえた。なぜ私の名前や顔を知っているのか、あまりに突然のことではわからなかったが、大勢の学生の中で先生に名前と顔を覚えられることは、それほど光栄なことであるか。それがきっかけで井上先生の卒業論文を取り、大学院に進学し、その後ずっとお世話になりました。あの時から50年間、私の教師時代を通して、学生たちの顔と名前を覚えることを何にもまして優先してきましたが、本当に大切な教えであったと考えています。

学恩の面からは、終始、井上先生の資質に及ばない以上、井上先生の設備一途の研究に対して、私は設備の要らない建築をつくることを目標にしました。それが代々木の体育館で「大きなノズルで自然の風を入れ込む」とことであり、その後の「風の道」研究になりました。また、空調設備はエネルギーを必要と

村野藤吾論

20世紀を体現した男流建築家

倉方俊輔建築史家、苗H6・院H8・博H11)

11月下旬にOTTO出版から『村野藤吾建築案内』という本が刊行されるといふ。先日、編集に携わった石堂威さんやカメラマンの小林浩志さんと食事をする機会があり、刊行までの経緯や苦労話などを聞いた。

同書には、村野藤吾のほぼ全仕事が取められている。また渡辺節建築事務所にいた時に匿名で設計した「南大阪教会(1928年)」から、没後に竣工した「京都宝ヶ池プリンスホテル(1986年)」まで58年間の135作品を、ビルディングタイプごとに見渡すことができる。これまで地域の建築物を集めた「建築MAP」はあっても、一建築家を対象とした類書はなかった。まず書籍の質量からして、建築種別も地域も時間も埋め尽くした、村野の巨人ぶりが伝わってくるようだ。

村野研究を進めている京都工業繊維大学を中心とした解説陣も豪華で、読み応えがあるが、話を聞いて一番印象的だったのは、小林浩志さんが一つ一つ尋ね歩いたという刊行までの経緯だった。現状がどうなっているかを確認し、誤りのデータは正す。カラーで撮影していないものは撮る。本書の刊行は、そうしたサーヴェイの成果なのだ。大変だが、こうやましい作業だとも思った。

するわけで、エネルギーを少しでも使わないため、建物経常費の測定や研究を続けてきました。反面教師としての教えもまた、研究者としての道を教えていただいたことと感謝しています。井上先生は70歳で大学を退職された後、建築設備の研究者を多く育てたことの功績大として学会大賞を受賞されたこと、私も都市環境分野の卒業生を多く育てることで大賞をいただいたことがその証です。その経過を報告した「環境学のマエストロ」(KAJIMA)2009年7月に「第1回建物の外側へ―ヒートアイランドと都市環境」の原稿を書き、その出版物が届いた日に先生が亡くなられました。先生に読んでもらえなかったことが心残りです。先生が大学を退職された後、井上宇市建築設備研究所を開設され、90歳過ぎまでやり残した仕事を続けられたこと。これもまた、これからの私にとって大きな励みになっています。銀座に尾島俊雄研究室を開設したのも、先生に教えられた「その道の求道者」として、現役でやり残した未完のプロジェクトXを成し遂げることによって、井上先生の、教師として、研究者として、また人生の師としての御恩に報いたいと考えております。



上：代々木体育館(国立屋内競技場)
中・下：お別れ会の様子



井上宇市先生お別れの会

原田仁(苗S0・院S52/三菱地所設計)

7月17日に91歳で逝去された井上宇市先生のお別れ会が、8月28日にリーガロイヤルホテル東京でしめやかに営まれました。会には井上門下の教え子や、友人、建築設備関係の団体、企業から多くの方々が出席し、祭壇に献花して故人を偲びました。海外からの留学生で現在は祖国で指導的な立場についておられる方々も多く来日し、参加されました。

また建築学会をはじめ多くの団体からの弔電が披露され、ドイツ技術者協会からも弔意を述べる書簡をいただき、先生の幅広い交友と建築設備に対する大いなる貢献の顕れとなりました。

会場では先生の生い立ちや活動記録などが展示され、また近年の先生の生活風景などがビデオ上映され、参会者にとっては懐かしい思い出に浸る機会ともなりました。門下生一同、こよなく早稲田と教え子を愛した井上先生の教えを胸に、最後に「フレイ、フレイ、イノウエ ウイチ」の声援で会を終えました。

自分のことを考えてみると、村野藤吾に興味を抱いたのは、やはり設計した建築が気になって、尋ね歩き、もつと好きになってというループからだった。もちろん、『村野藤吾建築案内』ほどすべてを見たわけではないが、それでも一つ一つ違う。時にえげつないようなデザインもあり、洞窟のような存在だけでなくガラスの透明性だって生かしている。工業製品を駆使し、すぐにダメになりそうな素材にも手を出すモダンストブりは晩期まで顕在だ。

実際に建物を見てから、改めて作者の言葉を読んだり、時代を考えていけば、すんなり合点が行くことが多い。昨年、パナソニック汐留ミュージアムで開催された「村野藤吾 建築とインテリア」展の図録に寄稿を依頼され、「数えられるもの、数えられないもの―村野藤吾の「モダンズム」という文章を寄せた。そこでは1920年代からの「モダンズム」の流れに村野藤吾を位置づけた。背後には昭和の実業家たちの姿があり、村野はそれに乗りながら、公共の場を内部に埋藏した。そのためのお花繚乱の手法だった。ますます「数」に流されていく世界の中で、それにいたすらに反抗できず建築する



私たちの眼が、再び彼に向かうのは当然かもしれない。

あるいは今、「村野的なもの」は、どこか近寄りがない「巨匠」の伝説や、「ああ『早稲田建築』の系譜ですね」といったような反応を超えて、拡がり、ようやく広範な理解を得ているのかも知れない。その価値がある。物事は意外と、真ん中が開いている。村野はそんな再考されるべき、真ん中の一人だろう。

最後に、とはいえ、という話を少し。村野という建築家を見てみると、ここまでは行ける。ここまでは行けない、と思う。そして、いわば「男流建築家」たることも。少なくとも20世紀の主流を占めた建築の在り方を、これほど深く体現している建築家は見当たらない。既往の思考にとらわれず、過去からの状況を自分のために用意されたもののように使いこなして、第二の「自然」として建築をつくり出す。その結果が空回りする独善に陥らないのは、空間を把握し、素材を熟知し、人の使い方を知り、常に若々しくある才能に長年の修練で磨きかけた結果である。私たちはもう、この壁の向こうに行かなくてはいけない。個人の構想のつくり出す世界に、もはや頼り切ることができない。

では、どうするべきか。出発すべき到達点を示してくれるのは、村野の存在だろう。全肯定でも、全否定でもない村野論が求められる。

表1 JABEE/UIA認定取得までの流れ

1996年	UIA総会(パルセロナ)で「UNESCO-UIA建築教育憲章」採択
1999年	UIA総会(北京)に早稲田が古谷誠章教授を派遣
2000年	早稲田、6年制カリキュラムを導入。穂積信夫名譽教授がUNESCO-UIA建築教育認定委員となる(2001年より古谷教授に交替)
2001年	JABEE、技術者教育プログラムの正式認定を開始
2002年	UIA総会(ベルリン)で「建築教育認定制度」採択
2007年	JABEE、大学院版を立ち上げ
2008年	JABEE認定制度に対するUNESCO-UIAの審査実施
2009年	早稲田、大学+大学院でJABEE認定を取得 JABEE認定制度がUNESCO-UIAによる認定を取得

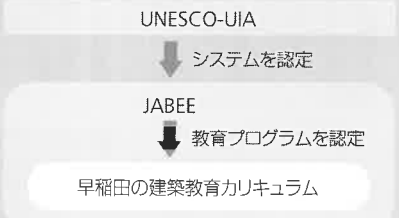


図1 JABEE認定システムをUNESCO-UIAが認定



JABEE審査風景

審査●UIAの現地審査とは?
UNESCO-UIAによる認定では、JABEE本体のほか、JABEEによる3つの教育機関への認定プロセスも審査対象となる。そのため早稲田は、JABEEに加え、UNESCO-UIAによる審査も受けることになった。
工学系を含めた教室全体のバックアップを得ながら、担当者はシラバスや自己点検書の整備、課題図面などのエビデンス収集をはじめとすると膨大な準備作業に取り組んだ。その結果、08年12月に行われたUNESCO-UIAの現地審査では、設計課題や卒業計画の展示などによる充実したプレゼンテーションを実施できた。ちなみに、エビデンス収集のために作品の提出を求められることを、学生は「ジャバラ」と呼ぶ。

JABEE—UIA認定についての基礎知識
用語●UNESCO-UIA、JABEEの認定とは?
「UNESCO-UIA建築教育認定」は、各国の建築教育認定システムを評価する制度。96年のUIAバルセロナ大会で採択された「UNESCO-UIA建築教育憲章(以下、教育憲章)」に基づいた教育の推進を目指し、国際連合教育科学文化機関(UNESCO)とUIA(国際建築家連合)が進めている。
「JABEE認定」は、エンジニア教育プログラムに対して審査・認定する日本の制度。国際的な技術者資格との連動を目指し、日本技術者教育認定機構(JABEE)が01年度から正式認定を始めた。一般には学部教育を対象とするが、教育憲章への対応から、JABEEは建築の設計計画分野に特定した大学院版を07年に立ち上げた。
[→表1(年表)]

仕組み●早稲田とUNESCO-UIA、JABEEの関係は?
UNESCO-UIA建築教育認定では、その国の認定システムが教育憲章に基づいているかどうかを審査・認定する。JABEEは、日本の認定システムとして今年7月にUNESCO-UIAから承認された。国のシステムとしては韓国と並んで初めての認定。
一方、早稲田大学創造理工学研究所建築学専攻(以下、早稲田)は、学部と大学院を合わせた形でJABEE認定を今年5月に条件付きで取得した。つまり「早稲田はJABEE認定を受け、JABEE認定システムをUIAが認定する」という入れ子の関係により、早稲田の建築教育は国際的なお墨付きを得たことになる。
[→図1]

審査●UIAの現地審査とは?
日本の建築教育を国際的に認知してもらえようとするには、まず、UNESCO-UIAの認定を受ける国内の制度が必要だ。ところが、従来の日本には建築教育に対する認定の仕組みがなかった。そこで日本建築学会が中心となり、JABEEの技術者教育認定システムの仕組みを活用し、これを建築教育にふさわしい形に整えることになった。ただしUNESCO-UIAでは、5年の専門教育と2年の実務経験を条件としているため、学部教育だけでは要件を満たさない。そのためJABEE認定の大学院版を立ち上げ、学部と大学院を合わせた認定プロセスについてUNESCO-UIAの認定を受ける形を採用した。
なお、UNESCO-UIAが求めているのは建築家教育なので、大学院版JABEEは設計計画系に絞っている。これに対し、学部版JABEEは設計計画系と工学系の両方を対象としているという違いがある。

……今回、早稲田の建築教育のカリキュラムがJABEEによって認定され、JABEE認定制度がUNESCO-UIAに承認されました。こうした認定取得によって、どのようなメリットがあるのでしょうか。
▼導入する意義として最も大きいのは、その大学で行われている教育の内容が明示され、説明可能になることだと思います。
もともと欧米では学生の大学間の移動が活発なため、教育に対する認定のシステムが早くから導入されてきました。途中の学年で他大学からの学生を受け入れる際、前の大学が実施している授業をどう追認するかを明確にしておく必要があるからです。そこでは単位数だけでなく、どういう教育をしているのかという内容が第三者でもすぐ分かるように示さなければいけません。
一方、日本では教育認定という仕組みに対する

馴染みが薄かった。その大学がどういう教育を行っているのか、どういうビジョンの下にカリキュラムが設計されているのか。暗黙のうちに意思の疎通があると思え、個々の大学に任されている状態でした。しかし国際化の時代を迎えた現在、われわれもこうした状況を変える必要に迫られていたのです。
……これまでは先生方が暗黙の了解のうえでカリキュラムを積み上げていたのに対し、最低限これをしてはという規範があつて、そのパーツの役割を個々の先生が担っていくというイメージですか?
▼堅苦しく解釈するとそうなのかもしれません。ただ、UNESCO-UIAが定めた教育憲章そのものは、きわめて常識的な内容がほとんどです。5年以上の専門教育が必要とか、座学ではなくてスタジオ形式の対話型教育をせよという項目はありますが、その他は環境への配慮やクライアントの要求を的確に汲み取るなど、ごく当たり前の内容ばかりです。むしろ大切なのは、「こういうカリキュラム構成で教育しているんだな」

……大学間で単位を相互に取得できるようにするのですか。
▼今はまだそこまでしていません。将来は、学部を他のJABEE認定大学で学び、大学院は早稲田へ来るといった学生に対して、両者を合わせてJABEEの認定修了生にするということはできるでしょう。また単位ごとのやり取りも、ありうると思います。でもそれぞれの学校によって目標を定めていますから、教育がはきはきになる状態を積極的に押し進めようというわけではありません。ただ、外国人の学生にとっては、相互承認で

認定取得のメリット
教育内容が明示され、大学間の移動が容易に

……これは先生方が暗黙の了解のうえでカリキュラムを積み上げていたのに対し、最低限これをしてはという規範があつて、そのパーツの役割を個々の先生が担っていくというイメージですか?
▼堅苦しく解釈するとそうなのかもしれません。ただ、UNESCO-UIAが定めた教育憲章そのものは、きわめて常識的な内容がほとんどです。5年以上の専門教育が必要とか、座学ではなくてスタジオ形式の対話型教育をせよという項目はありますが、その他は環境への配慮やクライアントの要求を的確に汲み取るなど、ごく当たり前の内容ばかりです。むしろ大切なのは、「こういうカリキュラム構成で教育しているんだな」

……その他のメリットもあるのでしょうか。
▼学生のモビリティが容易になり、欧米並みに途中の移動や編入ができるようになることですね。同じ大学で育っていく人もいるけれど、国際的なレベルで人材の交流を活発化させることによって外に対する目を開き、井の中の蛙に陥らないようにしていくことも、目的の一つでした。

広報委員会 ●聞き手……小菅克己(番S51・院S53)、宮川浩(番S56・院S58) ●構成……守山久子(番S61) ●撮影……長侑希(学部3年)



JABEE—UIAの認定取得で早稲田建築はこう変わる!
2009年7月、JABEE認定の仕組みが、建築家教育プログラムに対する国際的な認定を進めるUNESCO-UIAから正式に承認された。これにより、既にJABEE認定を受けている早稲田大学創造理工学研究所建築学専攻の設計計画系の教育が、国際的に認められたことになる。JABEE—UIA認定の取得を目指した早稲田の取り組みの狙いや経緯について、古谷誠章教授に総括していただいた。

インタビュー●古谷誠章(早稲田大学教授/番S53・院S55・博S61)

きるようになることは大きなメリットでしょうね。また他大学と共同でサマースクールやワークショップを企画し、それを単位として認めるという取り組みは進むのではないのでしょうか。

認定と早稲田の建築教育 共同の卒業計画に 高い評価

……そもそも早稲田はどのような経緯で建築教育の認定取得を目指したのでしょうか。

▼99年、教室会議での尾島(俊雄)先生の一言が始まりでした。「UIA総会に誰かを派遣して情報を収集し、早稲田型の新しいカリキュラムを立てなければだめだ。そこにいる古谷君、どうだね」と突如、話を振られたのです。

これを受けて、1カ月後の6月に開催されたUIA総会(北京)に放り込まれ、その後、学内でカリキュラムを改変する小委員会を立ち上げて座長となりました。翌2000年4月には大鉈を振るって6年制カリキュラムを導入し、科目を再編成するという慌ただしさです。この時点で、UNESCO-UIAの認定を受けることを視野に入れていました。

……カリキュラムはどのように改変したのですか？
▼当時は計画、構造、環境などの系ごとに多数の選択科目があつたんです。一見、ある意識をもって履修していくととても多様な教育を受けられるように見えるけれども、単位が取りやすい科目に学生が集中しているのが実態でした。

そこで学部1年から3年までは専門科目をほとんどなくし、必須科目の度合いを高めました。すべての学生が基本的な事項をマスターできるように、幅広い内容を全員が履修するようにしました。一方、学部4年以降は専門知識を深める期間と位置付けました。

また学部4年時には、1カ月ほど外部で仕事をしてくるという制度を取り入れました。実務の体験を踏まえ、社会性を備えた視点で卒業計画に取り組めるのは学生にとって大変意味があることです。さらにその後、卒業計画では異なる分野の学生が組む共同設計方式を導入しました。

……UNESCO-UIAの審査では、こうした早稲田のカリキュラムはどのように評価されましたか。

▼異分野の学生が共同で行う卒業計画の手法が高い評価を受けましたね。意匠だけでなく、歴史や都市計画、構造、環境、生産などの学生をクロスすることで、それぞれの専門のバックグラウンドを生かした取り組みができる。これは建築と工学が分離した欧米とは異なる方法であり、「工学部の中に建築学科があつて、エンジニアと一緒にいる意味がよく分かった」と話す審査員もいました。

……実務の世界でも、各専門家のコラボレーションはますます必要になってきています。卒業計画の共同作業は、大建築家とは異なる設計者の新しい将来像へとつながっているかもしれません。

▼01年から参加したUNESCO-UIAの教育認定に関する評議会で感じたのは、地域や文化の多様性を尊重しているという姿勢です。UNESCO-UIAはけっして世界統一基準をつくらうとしているわけではありません。各地の文化や固有性を尊重しつつ、交換できるプラットフォーム

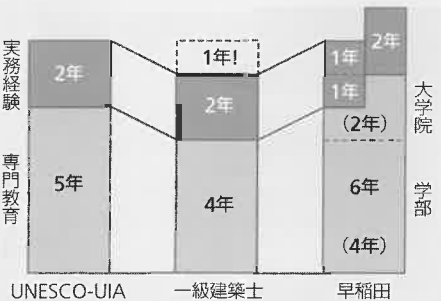


図2 一級建築士はUNESCO-UIAの要件に1年たりない



を得ようとする際、英国のAスクールを出た人と同じ扱いになるのでしょうか。
▼そこまでの道のりはかなり遠いでしょうね。
UIAが最終的に目指すのは、加盟国同士の建築家資格の相互認定です。資格の条件が同等となつたら、当事者である2国間で協議して定める。とする推奨ガイドラインも、99年にできました。その前提として、教育憲章に基づいた建築教育が構築されている必要がある。UNESCO-UIAの認定によってこれが共有できるようにしたので、あとは日本の建築士資格が同等とみなせるものにできるかどうかにかかっています。そういう意味で、JABEEの仕組みがUNESCO-UIAに承認されたことは、資格の相互認定へ向けた第一歩にはなるでしょう。

……ところで今年はインターンシップへの対応が話題になっていますね。

▼どうも、UNESCO-UIAがインターンシップを必要としているのではないかと誤解されがちなんです。教育憲章には「実務と連携した教育が行われなければならない」と書かれていますが、これは実務から乖離するなという意味です。あとは、5年の専門教育と2年の実務経験を必要とし、このうち1年は大学に組み込んでもいいと書いてある。規定はそれだけなのですが、かなり多くの大学が「インターンシップが必要」と誤解してしまつた。

加えて、建築士法の改訂に伴うインターンシップの導入がからんできます。国交省は、「夏期4週間のインターンで実務経験1年」、「春・夏・春の休みに合計3・5カ月のインターンに行く」と2年という設定を認め、大学院2年で一級建築士の受験資格を取得できるひな形をつくりました。そのため、「大学内で受験資格を取得できるようにしないと入学者が減るのではないか」と心配する大学も出ている。2年の大学院をそのまま実務経験にカウントする従来の制度も相当乱暴でしたが、今回のものも改善の余地があります。大学院でこそ学べる必要があるのに、極端なインターンシップの導入がその貴重な機会を奪ってしまっています。

早稲田では実務経験の換算を1年に抑え、学内で十分な教育の機会を確保できる枠組みを定めました。ただ、問題は都市計画のコンサルタントや役所を目指している学生への対応でした。行政に進んだ場合、営繕や確認申請以外の業務に携わっている人は、一生働いていても一級建築士が取得できない。そこで、こういう分野を目指す学生のために、「修士3年間で2年分の実務経験」が認定される単位を用意しました。

いずれにせよ、全般には学生のほうが見識をもっているようで、実際にはそれほどインターンシップに振り回されてはいません。

国際化への対応 一級建築士だけでは 国際的に認知されない

……今後、国際化はますます進んでいきます。将来的には、たとえば早稲田を卒業してRIBAの資格

……APECC(アジア太平洋経済協力会議)の参加国でも、2国間で合意できれば建築家を相互に認め合うようにしようという動きが進んでいます。とはいえ、地域性があるから、日本で一級建築士の資格をもつていてもそのまま通用するわけではありません。

▼日本の場合、もう一つ関門があります。
一級建築士は資格取得条件が「専門教育4年+実務経験2年」なので、「専門教育5年+実務経験2年」というUNESCO-UIAの要件を満たしていないんです。一級建築士のもう一つ上に資格ができないと相互承認の道は開かれませんが、そのためにも、「大学院JABEEの認定を受けた教育の修了者なら、ある条件の下で国際的な資格の受験要件が整う」といった関連を付けなければいけないと思つているのですけれど。

残念ながら、今のところ国交省はJABEEについて無関心です。また一級建築士の上位資格として設けられたJIA(日本建築家協会の登録建築家や日本建築士会連合会の専攻建築士についても、これらを統合して国際的に相互承認できるような仕組みをつくらうという動きがありました。結局は頓挫したままです。

……今後の展望についてお聞かせください。

▼最近、あらためて米国のすごさを痛感しています。米国で教育を受けた人が母国へ戻って市場を開拓することに、国全体で底知れぬ情熱を注いでサポートしている。これは日本という国に決定的に欠けている点で、世界中で活躍するための市場をつくるという国家的戦略を持っていません。こうしたある種の野望を理解し、青図を描いていく政治家や行政が育つてほしいですね。

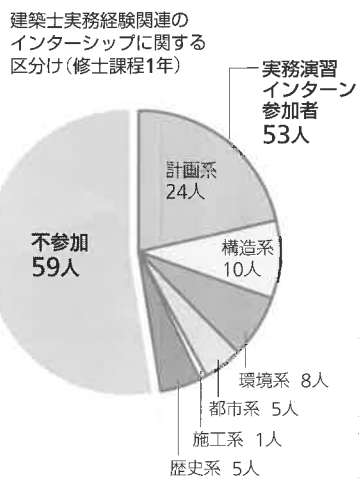
……環境分野の評価制度でも、日本のCASBEEに比べ、米国のLEEDや英国のBREEAMのほうが市場性は高いようです。

▼でも、今ならまだ間に合う。中国に米国型の仕組みを持ち込もうとしても、メンタリティーの面などで欧米人には理解できない部分がある出てくるでしょう。その点、日本人なら共通点もあるはず。日本に留学してきた学生に対して手厚く遇し、母国へ戻ってから活躍してもらえよう。厚い基盤をつくる方向に持っていければと考えています。(2009年9月7日、ナスカにて)

建築士法の改正により、大学院における実務経験には建築設計(意匠、構造、設備)・工事監理に関するインターンシップが必須となりました。建築学専攻では今年度より先端建築実務実習コースが設置され、大学院在学中に1年間分の実務経験の資格を得るには、関連演習科目および関連講義科目の履修に加えて、120時間以上(学外実施)あるいは180時間以上(学内実施)のインターンシップが必要となります。

今回は修士1年生の中から3名の実務実習コース履修者と1名の一般的なインターンシップ参加者に体験記を執筆していただきました

(川田康介/広報委員/修士2年)



インターンシップ体験記 1

秋田真 (前田寿朗研究室)

実務実習先: 日本設計



今年度より取り入れられた実務演習で、私は大手組織事務所の構造設計部でおよそ1カ月研修してきました。インターンシップ研修先決定まで、学生自身が直接動くことはほとんどなかったように思います。大学と企業間のやり取り、契約上の手続き、書類作成などの主要な業務は、担当されている建築学科の教授陣と会社担当者が献身的に処理して下さいました。学生が実際にやることは、希望研修先の学生間の調整、研修受け入れ先の会社担当者との面談でした。

研修では、10人規模のグループに配属され、その中で様々な立場の人とコミュニケーションを取りながら実際の物件を基に構造設計についてご指導いただきました。具体的には、ラチス屋根の接合部の模型作製による施工問題点の検討、基本設計のための汎用解析ソフトによる構造モデル作成および仮定断面の検討、RCスラブ・小梁・杭の検討、自社開発構造計算一貫プログラムによる構造モデル作成・検討などです。いずれも、その設計方法の背景も含め的確にアドバイスしていただ



き、十二分に理解することができました。

インターンシップを通して感じたことは、早稲田の建築学科と建築系の会社との信頼関係の強さでした。建築学科の諸先輩方が各分野でご活躍され、業績を残されているからこそ、可能になったのだと思います。

今回のインターンシップは多くの方々への支えがあり無事に終えることができました。研修先の方々には様々なプロジェクトで多忙なものにもかかわらず、研修受け入れを快く承諾してください、研修中には温かい差し入れなどもいただき、気持ち良く課題に取り組むことができました。私の勉強不足のためにいろいろとご面倒をおかけし、特にグループ長、グループの方々、建築学科の先輩方には終始お世話になりました。また、指導教員、インターン先担当者様にも各種手続きで多大なご尽力をいただき、ありがとうございました。

インターンシップ体験記 2

西野安香 (古谷誠章研究室)

実務実習先: NASCA



私は古谷誠章教授が代表をされている設計事務所・ナスカでインターンをさせていただきました。ナスカは別名駐車場事務所。駐車場の一角に突然建築事務所があるといった、奇妙で、でも利便性や立地の面白さがいかにも古谷教授らしい場所にあります。

普段、研究室でのプロジェクト等でナスカの方々と一緒に働く機会はありませんでしたが、拠点は研究室であり、仕事という意識はありませんでした。それが事務所でのインターンでは、仕事をしているという感覚を自然と持ってしまう。朝、駐車場のおじさんに「おはようございます」、夜、帰りに「お疲れさまです」とあいさつを交わすのは、学校とは違う、仕事という意識を高める日課となりました。

担当についての仕事は学校の設計です。所員の方々とデザインについて様々な検討を行い、模型や図面のお手伝いをしています。いつもの研究室のプロジェクトと違うことは、法律を細かく調べてデザインを行わなくてはならないこと、コストについて、素材について……。自分がこのようにデザインしたいと思っても、それを実現するための知識のなさがよくわかり、勉強が足りないな、と日々感じます。

その学校を使用する予定の児童たちとのワークショップにも参加しました。ワークショップは古谷研究室で慣れているはずでしたが、ナスカの一員として行き、「建築の専門家です」と紹介をされ



た時はさすがにいつも以上に身が引き締まる思いでした。設計が進むにつれ、自分のちよつとした案でも採用されるのはこんなにもうれしいことなん

だな、と最近改めて思います。天井のデザインについて今考えていますが、学校の空き時間や、街で遊んでいる時でも、この感じいいなとスケッチや写真を撮ってしまいう機会が増え、建築が楽しいと再認識する日々です。

ナスカは非常に雰囲気がかいですが、模型室をもつ少し片付けて広く使えれば、と思い試行錯誤しています。

インターンシップ体験記 3

川崎正博 (高口洋人研究室)

実務実習先: 山下設計



学生を17年もやっている、そろそろ社会人になれと社会の目がきつくなる。ところが学生というものはある日突然、別のものに変われといわれてもなかなかできるものではない。特に長いこと大学にいると余計難しい。さらに社会人に化けるとなると至難の業である。そう、大学生といえば日本では幼稚園児の次に暇をもて余しているところと揶揄される連中。一方、日本の社会人は世界で最も勤勉な労働者にして高度経済成長を成し遂げた猛者たちの子孫、いわばサイヤ人である。

さて、建築を学ぶ我々学生が社会人になれば、自ずと目指すは一級建築士の資格である。ところが一級建築士試験の受験資格である大学卒業後、社会人として2年間の実務経験を大学院進学との2年間で代用しようというのでは何か間違っている。この我々が建築界のひずみに耐震補強すべく、今年から始まったのが大学院生による一級建築士受験資格のためのインターンシップである。

そして紆余曲折を経た、ライオンの群の中にウサギが挑むインターンシップが始まった。

いざインターンシップが始まってみると、1日8時間机の前に座っているのは堅忍不拔の集中力が必要であるとわかる。その分腹の減り具合も速いらしく草食という訳にはいかない、半分寝ぼけて朝食をいつもより多めに詰め込んで、昼休みにはフラフラしている。

腹が減ってはなんとやら、昼休みにおいしいメシ屋を探すのが最大の楽しみとなった。幸いオフイス街だけあって、海千山千の社会人は舌も肥え、彼らを満足させる店が立ち並ぶ。そこはこくがあって味が無い、量だけは腹いっぱい食べる我等が学生街の店とは一味違うようだ。毎日違うメシ屋に行くも、不思議とどこのおばちゃんも大盛りタダだからとご飯を大盛りしてくれる。これでは学校に行くときと変わらない。うまいだけに余計に多く食べてしまつと、案の定1カ月弱が経つと120時間分の経験と2kgの肉を身につけインタ



インターネットを終えることとなった。
最後にインターネットに全面的に協力していた株主会社山下設計の皆様と準備にご尽力いただいた学校関係者に御礼を申し上げます。

インターネット体験記

本橋仁(中谷礼仁研究室)



インターネット先・独立行政法人
国立文化財機構東京国立博物館
学芸企画部企画課デザイン室

私は、現在東京国立博物館(以下、東博)の学芸企画部企画課デザイン室で展示デザインのインターネットに参加させて頂いています。展示デザインとは、あまり聞き慣れない仕事かもしれませんが。展覧会等で、どのようにしたら作品が見やすくなるか、その配置、照明、キャプションなどを総合的にプロデュースするのが展示デザインという仕事です。東博は、日本では今のところほとんど例がない、「小屋付き」の展示デザイン室を持つことで有名です。

もともと、展示デザインという仕事に憧れを持っていたのですが、まだ認知されていない仕事であるため、情報もあまりないのが現状です。東博のホームページで募集を見つけ、書類選考と面接を経た後に参加させていただけることになりました。

東博のインターネットのプログラムは、年度末まで基本的に延べ30日の出勤となっています。ただ、その30日をどのように組むかは、自分自身で決めることができます。私の場合は、夏休みに15日(5日×3週)と後期授業期間に週1でプログラムに参加しています。

具体的な作業内容ですが、東博で行われる特別展の展示を検討する模型製作を主にしています。建築学科の課題では、建物の模型をつくってきましたが、ここでは主にその中身、「展示ケース」の模型をつくっており、最初は戸惑いがありました。また、驚くべきことに、その模型の展示ケースの中に作品の模型まで入れて検討を行います。それにより、全体が完成した時のことをかなりリアルに検討できるのだらうと思います。このような裏側の努力があったからこそ、本物と対峙することのみ得られる感動が削り出され、今見ても色あせない新鮮さを私たちに与えてくれるのだと思っています。

私が進みたい展示デザインという業界は情報を得難い職種であったため、このインターネットでの経験は、仕事の内容を知ることができ、大変貴重な体験でした。また、建築家がこのような場



面においても活躍できることを知り得たことは、これから就職活動が本格的に始まる私にとって大変大きな収穫であったと思っています。

建築学科

創設100周年記念事業

始まる

本年度と来年度にわたり、早稲田大学建築学科は予科および本科の創設100周年を迎えます。この1世紀の間、多くの先輩卒業生の方々が各方面で幅広く活躍をされてきました。稲門建築会では、本年度からの記念すべき2年間を早稲田大学建築学科創設100周年と位置づけ、学校と共にいくつかの記念事業を企画しています。

早稲田建築合同クラス会2009をはじめ、総務、会員、事業、広報各委員会での様々な企画の他、稲門建築会全体の記念事業として、「100周年記念冊子」の発行と「早稲田大学/稲門建築会・ヒストリー/オーラル・アーカイブ」の実現を2本の大きな柱としています。

前者は稲門建築の教員、学外会員による名建築作品や様々な活動を取り上げながら、稲門建築を広く紹介することが目的です。冊子は通信可能な全会員に配布予定です。

後者は稲門建築出身の賢人・名人・達人の声、映像記録を収集整理し、また新規の取材、編集を行い、稲門建築会ホームページ上で公開し、多くの方々に早稲田建築を知っていただきます。今後5年間にわたり60名を取り上げることを目標とし事業を継続する予定です。

稲門建築会すべての会員の方々のご支援をお願いいたします。

地主道夫(推進委員会委員長/苗S48)

第10回稲門ライブラリー 公開記念懇談会

早稲田大学建築学科創立100周年を記念し、本年10月13日(火)、早稲田大学理工学部校舎を設計した安東勝男先生の図面や写真、スケッチを収めた「安東勝男ライブラリー」の公開記念懇談会が行われました。

懇談会会場には、西早稲田キャンパス56号館104教室が選ばれました。当時の理工学部校舎竣工図面には無かったはずの、「幻の教室」であるとのことです。

ゲストには、早稲田大学名誉教授の穂積信夫先生を始め、吉田研介氏、並木隆史氏、伊東正示氏をお招きし、古谷誠章先生の司会で、安東先生にまつわる様々なエピソードをお話いただきました。そこで、私たちは「教育者」「作家」「研究者」「親父」「江戸っ子」など、安東先生の多面的な顔を目の当たりにすることになります。

偉大な功績を残した人物というのは、どこか遠い世界の人のように感じてしまいます。御存命でない方なら、なおさらかも知れませんが。私は今回の懇談会に参加するまで、安東勝男先生に対しては設計者としてのイメージが強く、その人間性については知る機会がありませんでした。しかし、ゲストの皆様や司会の古谷先生が、安東先生との思い出をそれぞれの角度からエピソードを交え、楽しそうに語られるのを目の当たりにすることが、安東先生の「人」としての魅力を感じる事ができました。

また理工学部キャンパスは、私たちにとってあまりにも日常に溶け込んでおり、顧みる機会もあ

「OBによる仕事紹介」開催

学生とOBの「仕事紹介を通じたコミュニケーションの場」として毎年好評を博している「OBによる仕事紹介」を今年も開催します。就職を考えている学生が、様々な企業の先輩と本音で語り合える貴重なチャンスです。学生・OBの皆さん、年の瀬の土曜の午後、仕事についてお互い本音で語り合いましょ。

日時 12月19日(土) 13:00~19:00

場所 第一部 57号館201教室
第二部 55号館N棟大会議室・第1会議室
第三部 55号館N棟大会議室

2010年稲門建築会新年会のご案内

2009年も余すところ1カ月余となりました。相変わらず景気の先行きが見えない中、会員の皆様も忙しい毎日をお過ごしのことと思います。そのような中で、今年度は職域も増え、各職域幹事も活発に活動し、稲門建築会の未来に明るさも見えてきました。さて稲門建築会では、恒例の新年会を開催いたします。2010年の新春を皆さんでお祝いし、大いに飲み、語り合いませんか。

なお、当日は新年会の前に第2回職域幹事も開催され、前回同様大いに盛り上がるものと思われま

す。皆さんお誘い合わせの上ご参加下さい
日時 2010年1月27日(水)
職域幹事会 17:30~18:30 (55号館N棟大会議室)
新年会 18:30~20:00 (55号館N棟第1会議室)
会費 3,000円

関洋之(理事・会員委員会委員長/苗S52・院S54/梓設計)

「安東勝男」報告

ありませんでした。しかし、改めて図面を見ることが、教室の配置や窓、構造の考え方を認識することができ、このキャンパスへの新たな視野を得ることができたような気がします。

「偉大な人物の身近に感じられる一面」、そして「身近にあるものの偉大さ」を感じることでできた素晴らしい会でした。約60名の参加者による、終始笑いの絶えない大変楽しい懇談会となりました。

大川亮(事業委員会学生理事/苗H20/修士2年)
須賀友里(恵事業委員会学生委員/学部3年)



早稲田建築 2009年 合同クラス会 を終えて

秋晴れの穏やかな日、11月7日(土)に早稲田建築100周年記念を祝いつつ、2009年早稲田建築合同クラス会が開催されました。

第1部のシンポジウムは「早稲田建築の源流を考える」と題し、パネラーに川添登氏、中谷礼仁氏(苗S62・院H1・博H10)を迎え、58期同期の橋本純君の進行の下、「今 和次郎に見るリサーチの思想」について、多角的に、また様々な視点から語り合っていました。多数の参加者があり、盛況なシンポジウムになりました。

第2部は総合同会を女性アナウンサーにお願いし、明るく爽やかに、また素敵な声で懇親会を進行して



いただきました。稲門建築会の村松映一會長(苗S38)の開会挨拶に始まり、入江正之先生(苗S44・院S47・博S60)の乾杯に至るまで、稲門建築100周年に相応しいお言葉をいただきました。

- 1 シンポジウム。右からパネリストの川添登氏、中谷礼仁氏、司会の橋本純氏
- 2 シンポジウム会場風景
- 3 今和次郎先生の思い出を語る川添登氏
- 4 懇親会の挨拶。村松映一會長(右)と能勢修治合同クラス委員長
- 5 懇親会。今和次郎先生のパネル展示も
- 6 懇親会の和太鼓演奏
- 7 懇親会の締めは校歌斉唱で



日産自動車グローバル本社見学会報告

横浜開港150周年を迎える2009年8月にオープンを控えた「日産自動車グローバル本社」の見学会が、本年7月21日(火)、催されました。当日はあいにくの雨でしたが、横浜駅と新高島駅(みなとみらい線)からのアクセスが良く助かりました。参加者は当初の予定定員の25名を大きく上回る40名と大変盛況でした。

設計監督に谷口吉生氏、設計は竹中工務店、施工は清水建設という陣容はコンベンにあたり要求さ



れた「設計+施工のチーム」であり、見学会は竹中工務店の方々に、基準階→内部からの眺望→中央の吹き抜け階段→ゲスト応接フロア→屋上庭園→貫通通路→ギャラリー→講堂の順にご案内いただきました。なかなか入ることのできない基準階の見学は貴重な機会になりました。

施主から求められたのはオフィス機能として「知の創造」、さらにキーワードとして「俊敏性・アクセスのしやすさ(AGILITY)」「偶発的な出会い(SERENDIPITY)」「柔軟性(FLEXIBILITY)」という説明に、参加者からこれらのキーワードをどのように設計に組み込み、どのように設計が進められたのかといった質問が挙がりました。

印象的だったのは、広さ4,000㎡のギャラリーです。連続する広大な空間は歩くだけでも爽快。さらにギャラリーの2階部分は公共の貫通通路となつています。帷子川に新しく橋をかけて、横浜駅からみなとみらい21地区へとつながるこの通路は1日6万人の一般歩行者が想定されています。特徴的な五角形の敷地は水際にあり、そこに建つ建築の外観を目にすると、日産自動車による新本社ビルの「可能性」という大海に漕ぎ出す帆船というキャッチコピーに納得させられます。

最後になりましたが、今回の開催にあたりご尽力いただきました日産自動車、竹中工務店の方々をはじめとする皆様に深く感謝申し上げます。

杉山幸司(事業委員会学生理事/苗日20/修士2年)

今回は、素敵な女性ジャズシンガーによる懐かしいジャズのスタンダード、また和文を代表する力強い和太鼓の演奏と、大変魅力的なイベントとなり、好評で終わったかと思えます。

最後に全員で声高らかに校歌を歌い、閉会を菅原道雄副会長(苗S36)のお言葉にて締め括っていただきました。あつという間の2時間半でした。

また、合同クラス会幹事学年である58期だけで今年40名以上集まり、姿・形は変われど、昔からの仲間「高い志」を改めて確認できた素晴らしい再会の機会になりました。

最後になりますが、今回11月7日の早稲田建築合同クラス会の開催に際して、御尽力いただいた関係各位の方々にご場をお借りしまして、厚く御礼を申し上げます。

鈴木章夫(広報委員会理事/苗S58)



松田順吉九州名誉支部長を偲ぶ



去る9月14日、松田順吉・稲門建築会九州名誉支部長が逝去されました。享年87歳でした。世の定めで必ず来ることとわかっていても、松田先生の訃報は受けがたく無念です。

松田順吉先生(寛19)は、早稲田入学には父上や、叔父である松田軍平氏(松田平田の創

始者)の影響を受け、稲門建築に対する愛着は筋金入りです。1973〜2003年まで30年に及び九州支部長を務めながら、九州大学の非常勤講師や福岡地方裁判所の調停委員もごなし、日本建築家協会名誉会員、日本建築積算協会、日本建築士会連合会、日本建築学会ほか多数の要職を務められました。「建築に携わるすべての稲門者を集めて活動すること」を支部長時代に提案実行されたのが、現在の九州支部の「元氣じるし」の源です。1998年には、これらの功績に対し第1回稲門建築特別功労賞を受賞されました。

先生は、写真を愛し、タバコを愛し、ローマ字を愛しておられました。想い出は尽きませんがひとまず終え、松田先生のご冥福を祈念申し上げます。

金岡伸幸九州支部長/苗S37

9月30日の夜、「2009年度第2回稲門建築会理事會」に続き、「2009年度第1回稲門建築会職域幹事會」が55号館1階大会議室で開催されました。会長、副会長、その他理事の出席のもと、各職域から92社の内43名の職域幹事が集合しました。



2009年度 稲門建築会 職域幹事會開催

初めに村松会長の挨拶があり、職域幹事に対し、その役割は重要であり、会費納入口数の維持・拡大に尽力し、稲門建築会活性化の一翼を担ってほしいとの期待が述べられました。また、今年は建築学科創設100周年を迎える年であり、記念事業として「100周年記念冊子の発行」と「早稲田大学・稲門建築会・ヒストリー・オール・アーカイブ」を予定しており、皆さんの協力がぜひ必要、との話がありました。

総務委員会、事業委員会、広報委員会、各委員長からの委員会活動報告の後、会員委員会の関洋之委員長より稲門建築会規約と職域幹事規定の説明があり、本会が会員の会費で運営されていること、今年は昨年度の86職域から92職域に拡大した旨報告がありました。今年度は、職域幹事が交代した会社7社、新たに職域となった会社が8社あり、新たな職域幹事には囀

け期待が持てるような力強い発言がありました。また、その他の事項として、関委員長から12月19日に開催されるOBによる仕事紹介の概要、合同クラス会実行委員長の能勢修治氏より企画内容、事務局より建築学科創設100周年記念事業の概要、学生より建築展について支援のお願い等の話がありました。職域幹事の後、会場を移し、副会長の杉谷氏の乾杯で第2部の懇親會が始まりました。お酒と料理が豊富に用意され、皆さん、グラスを傾けつつ、あちらこちらで会話が花が咲き、会場は大いに盛り上がりました。途中、能勢建築合同クラス会実行委員長から11月7日に開催される合同クラス会への再度協力要請がありました。最後に白藤卓之氏のエールのもと、全員で肩を組んで「都の西北を合唱し、副会長の入江正之先生の挨拶の後、9時過ぎにお開きとなりました。

（鈴木康史／苗S59／東京建物）

2009年度稲門建築会職域幹事一覧

*は新たに加わった幹事会社

永澤明彦(苗H4)	(株)アイ・イー
梶山徹(苗H7)	(株)浅沼組
菅澤光裕(苗S53)	旭化成ホームズ(株)
永池雅人(苗S56)	(株)梓設計
左山光正(苗S50)	安藤建設(株)
木村誠吾(苗S49)	(株)石本建築事務所
園田陽一(苗S58)	伊藤忠商事(株)*
宇塚幸生(苗S50)	(株)入江三毛設計事務所
伊藤喜文(苗S54)	(株)NTTシリシアーズ
木本利之(苗H3)	大阪ガス(株)
賀持剛一(苗S58)	(株)大林組
木本浩(苗S51)	(株)興村組
山本明男(苗S48)	(株)鹿島建設
鈴木裕司(苗S51)	(株)光企画設計社
中島正夫(苗S53)	関東学院大学
薄義明(苗S53)	北野建設(株)
北神祐之(苗S55)	(株)熊谷組
川井隆夫(苗H3)	(株)久米設計
中島裕輔(苗H7)	工学院大学
岡部誠一(苗S43)	(株)構造計画研究所
島海俊行(苗S53)	(株)鴻池組
原英剛(苗H9)	国土館大学
山崎直宏(苗S53)	古久根建設(株)
木下修文(苗H12)	(株)コスモ・インシア
岡本光正(苗S55)	五洋建設(株)
川井康平(苗H14)	ザイマックスグループ
今春大介(院H10)	(株)坂倉建築研究所
岡野宏行(苗S55)	(株)佐藤総合計画
清水和彦(苗S53)	三機工業(株)
秋山嘉彦(苗H4)	JFEグループ
村上公敏(苗S60)	芝浦工業大学
竹内雅彦(苗S59)	清水建設(株)
大森英彦(苗S53)	(株)新建築
池田達也(苗H1)	新日鉄リテラリテック*
金子寛明(苗S58)	三菱冷熱工業(株)*
山田武仁(苗S56)	住友不動産(株)
川村明寛(苗S18)	住友林業(株)*
小張尚吾(苗S51)	西武建設(株)
深谷康典(苗S53)	積水ハウス(株)
大関美樹雄(苗S54)	(株)銭高組
松本哲弥(苗S61)	大成建設(株)
伴野正幸(苗S50)	高砂熟工業(株)
落合弘文(苗S56)	(株)精工
堀口謙司(苗S56)	(株)精工
高橋英治(苗S60)	千代田化工建設(株)
椎名明良(苗S54)	鉄建建設(株)
内藤純(苗S60)	(株)電通
中野淳太(苗H9)	東海大学
小島 慎(苗H14)	東海旅客鉄道(株)*
加藤千博(苗S58)	東急建設(株)
南海幸男(苗S54)	(株)東急設計コンサルタン
松尾隆一(苗S59)	東急不動産(株)
山本洋史(苗S61)	東京ガス(株)
浅野 新(苗S61)	東京急行電鉄(株)
鈴木康史(苗S59)	東京建物(株)
町田晃治(苗H3)	東京電力(株)
濱本卓司(苗S50)	東京都庁
本橋啓一(苗S57)	東電設計(株)
山田孝司(苗S57)	都市デザイン
前川一郎(苗S55)	戸田建設(株)
小池研司(苗S53)	飛島建設(株)
田原潤一(苗H16)	西日本旅客鉄道(株)*
下村 宏(苗S59)	西松建設(株)
神田篤志(苗H15)	(株)日建設計
石田直也(苗S62)	(株)日建ハウジングシステム
伊藤 亮(苗H14)	日揮(株)*
福島彰彦(苗S58)	日本環境技術研
宮崎正俊(苗H2)	(株)日本設計
高藤 忍(苗S60)	(株)乃村工業社
石堀良一(苗S57)	野村不動産(株)
末広英之(苗H9)	(株)博報堂
中澤 徹(苗S55)	(株)関組
川本哲也(苗H7)	パシフィックコンサルタンツ(株)
下田利和(苗H14)	東日本旅客鉄道(株)
岡田 高(苗S52)	(株)フジタ
鈴木章夫(苗S58)	前田建設工業(株)
武田 勲(苗S57)	(株)松田平田設計
勇上直幹(苗H15)	ミサワホーム(株)
谷垣正治(苗S54)	三井住友建設(株)
成松由希子(苗H13)	三井不動産グループ
田代誠一(苗S53)	三井ホーム(株)
遊佐謙太郎(苗S54)	三菱地所(株)
渡邊顕彦(苗S57)	(株)三菱地所設計
大竹 宏(苗H14)	三菱商事(株)
大友 理(苗H5)	(株)三菱総合研究所
玉置健治(苗H9)	森トラス(株)
田中敏行(苗S59)	森ビル(株)
松野 淳(苗S55)	(株)安井建築設計事務所
成島 亮(苗S57)	山下設計
浜野四郎(苗H5)	横浜市役所
熊谷順治(苗H1)	横設計室*
田邊新一(苗S57)	早稲田大学

会費納入率上位40位 (2009年10月31日現在)

順位	職域名	納入率
1	新菱冷熱工業(株)	100.0%
2	工学院大学	83.3%
3	(株)松田平田設計	64.3%
4	東日本旅客鉄道(株)	58.8%
5	関東学院大学	55.6%
6	(株)久米設計	51.1%
7	(株)観光企画設計社	50.0%
7	国土館大学	50.0%
7	芝浦工業大学	50.0%
7	(株)都市デザイン	50.0%
11	早稲田大学	46.4%
12	大成建設(株)	45.8%
13	(株)安井建築設計事務所	44.4%
14	戸田建設(株)	44.3%
15	(株)佐藤総合計画	43.8%
16	(株)梓設計	42.9%
16	新日鉄エンジニアリング(株)	42.9%
18	三菱地所(株)	40.9%
19	(株)三菱地所設計	40.3%
20	東京建物(株)	40.0%
21	(株)日建設計	38.6%
22	西武建設(株)	38.5%
23	東海旅客鉄道(株)	37.5%
23	東京電力(株)	37.5%
25	野村不動産(株)	35.0%
26	安藤建設(株)	34.8%
27	高砂熟工業(株)	33.3%
28	前田建設工業(株)	30.3%
29	清水建設(株)	30.2%
30	(株)石本建築事務所	30.0%
30	佐藤工業(株)	30.0%
30	東海大学	30.0%
33	(株)オール・アイ・イー	28.6%
33	(株)新建築社	28.6%
33	(株)東急設計コンサルタント	28.6%
33	(株)日建ハウジングシステム	28.6%
37	(株)三菱総合研究所	27.3%
38	(株)日本設計	26.2%
39	(株)NTTファシリティーズ	25.7%
40	(株)大林組	25.2%

訃報

左記の方々が亡くなられた旨事務局にお知らせいたしましたが、謹んでご冥福をお祈りいたします。

- 太田静六(苗S10) H21.10.8 新屋敷 保工S6 H21.3.3
 - 柴崎欽一(苗S23) H20.12.29 船倉 武工S23 H21.6.14
 - 小环英二(苗S27) H21.1.10 布施 享工S24 H21.6.21
 - 三浦 寛(苗S29) H21.6.1 尾崎嘉文(覚S16) H21.5.4
 - 櫻田 滋(苗S57) H21.1.4 岡田武夫(覚S18) H21.7.21
 - 大村有二(苗S61) H21.4.16 尾崎雄彦(覚S18)
 - 宮崎逸郎(苗S32) H21.10.16 松岡多治(覚S18) H21.1.24
 - 下村淳一(苗S39) H20.11.22 谷川俊作(覚S18)
 - 窪田敬宣(院S60) H19.11.22 畑 定(覚S19) H21.7.30
 - 古内助四郎(友S6) H10 藤井雅典(覚S19) H20.1.2.19
 - 青山昇(友S9) H7 高島義衛(覚S22) H21.6.23
 - 海老根武松(友S11) H21.1 山口雄三(覚S24) H13.8
 - 今泉正喜(友S18) H18.2 富丘泰寿(覚S24) H20.5.21
 - 榜塚真一(友S30) H20.3 井上宇市(教S28) H21.7.17
 - 木村新一(友S34)
- (2009.6.16) (2009.10.3受付)

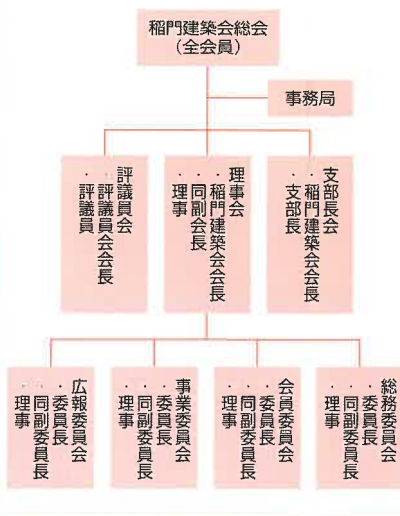
主な会務の報告

- 2009年7月以降の主な会務を報告します
- 会議
 - 第2回理事會：9月30日
 - 第1回職域幹事會・懇親會：9月30日
- 活動
 - メールマガジンの発行：8、9、10、11月号
 - 第2回見学会：「日産自動車グローバル本社」：7月21日
 - 第2回設計製図公開講習会(支援)：9月27日
 - 稲門建築セミナー：「ライブラリー公開懇談會」(安東勝男)：10月13日
 - 秋の大会：早稲田建築合同クラス会：11月7日
 - 理工展(建築展、芸術展)：11月6日～8日

事務局便り

今回は稲門建築会の運営組織を紹介します。稲門建築会の会則では組織が言葉で表現されていて、図示すると左のようになります。会員の総意になる総会の下に、評議員會、理事会、支部長會があります。評議員會は稲門建築會会長の推薦や理事会に諮問、勧告などを行います。また、会員相互のネットワークを密にするため北海道、東北、信越、北陸、静岡、名古屋、近畿、中国、四国、九州の10支部があり、それぞれの支部長の元で支部独自の活動を行っています。理事会が稲門建築會の実質的な実行組織であり、紙面の都合がありこれらについては次回に紹介したいと思います。

大木紀通(事務局長／苗S42)



編集後記

卒業生を含め、数多くの建築関係者が海外で活躍されています。一方、アジアや中東地区では、日本をはじめ欧米の設計者がこぞって重要な施設の計画に携わっています。現象面だけ捉えると、建築界もグローバル化が進んでいるようにも見えますが、それは裏腹に教育制度や建築設計資格の相互認証の点では、まだまだ未熟で足腰が脆弱な状況です。その中で早稲田大学の教育システムがUIAのお付き合いを得たことは、エポックメイキングな出来事です。こうした動きが他大学にも広がり、良い意味での流動化が進むことを期待します。

富川浩(広報委員／苗S56・院S58／日建設計)